

MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY  
ANNUAL REPORT  
OF  
RESEARCH INSTITUTE FOR LINGUISTIC  
CULTURAL STUDIES

Vol.27 MARCH 2017

Contents

- Treatments of Proverbs and Idioms in Chinese School  
—A Report on the Acquisition of Proverb by Children of the Ethnic  
Koreans in Chinese Primary School— LI Huimin
- Leaning from Oral Literature Proverb Miyako TAKAMURA
- The Common People and Proverbs in *The Canterbury Tales* Katsuaki TAKEDA
- The Social Circumstances and Usage of Proverbs in Contemporary Japan  
Yoshikatsu KITAMURA
- On the Mutual Relation between Ordinary Person's Life Style and Proverb  
Toyoko MORITA
- An Analysis of the Iroha Karuta Sayings in Tokyo and Kyoto Hideo SATAKE
- UTSUMI Keiko's View of Proverb and Her Original Proverb Tsuneo NAGANO
- Titles of Translated Foreign Literary Works Akira TAMAI
- Devices in the Popular Blog Title Chiaki KISHIMOTO
- Stories Related to Name Hideo SATAKE
- Naming and Selection of Translated Words Yoko YAMASAKI

武庫川女子大学

言語文化研究所年報

第 27 号

2016

# 武庫川女子大学 言語文化研究所年報 第 27 号

## 目 次

I. 言語文化セミナー（ことわざフォーラム2016）発表要旨	
〔開会の挨拶〕	
ことわざフォーラムの開催にあたって	
玉井 暲（武庫川女子大学言語文化研究所所長）	1
〔研究発表〕	
中国の学校におけることわざと成語の取り扱い	
—中国朝鮮族小学校子供たちのことわざ習得に関する報告—	
李 惠敏	3
口頭文芸ことわざからの学び	
無文字社会ボンデイにおいて	高村美也子 7
『カンタベリー物語』の庶民とことわざ	武田 勝昭 11
〔講演〕	
ことわざの現在	北村 孝一 15
〔シンポジウム〕	
庶民の暮らしとことわざ	森田登代子 21
言語面から見た東西いろはかるた	佐竹 秀雄 23
内海桂子のことわざ観と創作ことわざ	永野 恒雄 27
II. 言語文化研究所シンポジウム「ネーミングのコトバ学」	
1. シンポジウム「ネーミングのコトバ学」の開催にあたって	
玉井 暲（言語文化研究所所長）	31
2. シンポジウムの発表要旨	
1) 「外国文学作品の翻訳タイトルの付け方」	玉井 暲 32
2) 「人気ブログのタイトルに見られる工夫」	岸本 千秋 32
3) 「お名前物語」	佐竹 秀雄 33

### 3. 論文

ネーミングと訳語選択

ーコトバ学への一つのアプローチー

山崎 洋子 35

キーワード ネーミング 訳語選択 フレーズ化 タイトル化

Ⅲ. 言語文化研究所活動の概要 2015-2017 45

執筆者紹介 50

編集後記 51

I 言語文化セミナー  
ことわざフォーラム2016  
発表要旨



# ことわざフォーラムの開催にあたって

玉 井 暲（武庫川女子大学言語文化研究所所長）

この度、「ことわざ学会」との共催で、「ことわざフォーラム2016——庶民の暮らしとことわざ」を、武庫川女子大学言語文化研究所にて開催させていただくこととなり、光栄に存じます。心より本フォーラムの開催を歓迎いたします。

「ことわざ」のもっている深い言語的・文化的意味については、私も、英文学を専攻しているものですから、日頃から十分に認識しております。授業で英文学作品を読んでいると、イギリスのことわざに出会うことがたびたびあります。その場合、学生に対して、そのことわざのもっている文化的差異にもとづいた意味を説明することが求められます。さらに、文学作品のなかにことわざが登場する場合は、ただ単純に挿入されているのではなく、物語の展開とからめて使用されたり、パロディやアイロニーなどの意味合いをこめて編集・修正された形で出てくる場合もあって、説明には一工夫しなければならぬことが多々あります。

たとえば、イギリスの十九世紀末の文学者オスカー・ワイルド（Oscar Wilde, 1854-1900）の作品に『まじめが肝心』（*The Importance of Being Earnest*, 1895）という喜劇がありますが、そのなかに、“Call a spade a spade”（鋤〔すき〕は鋤と呼べ）ということわざが出てきます。一人の若い魅力的な青年をめぐって、都会育ちの貴族の娘とカントリー・ハウスで暮らす田舎の娘との間で恋のさや当てが展開する場面があるのですが、二人の娘はそれぞれこの理想の青年とはすでに婚約を済ませているのだと言い張り、自分の婚約の正当性を主張します。このように話が混乱してくる状況のなかで、田舎で暮らす娘セシリーは、恋敵である都会人の娘グエンドレンに向かって、このことわざを用いて、興奮気味にタンカを切ります。すると、自分の言ったせりふを逆手に取られ、逆に、手痛い切り返しにあってしまいます。この

場面はこのようになっています――

セ シ リー：もうこうなったら、見栄も体裁もあったものじゃないわ。  
鋤を見たら鋤と言うわよ。

グエンドレン：（皮肉っぽく）さいわい、わたしは鋤を見たことがない  
のよ。はっきり言って、わたしたち生活環境はずいぶん  
違うわけね。

「鋤は鋤と呼べ」ということわざは、日本の「齒に衣（きぬ）着せぬ」ということわざに似て、「思っていることを率直に言う」という意味で使用されますが、この劇のこの場面では、「鋤」の比喩的意味は消され、字義通りの、農業にかかわる道具として使用されており、都会性と対比される田舎育ち（あるいは田舎者）という文化的意味が浮上してきています。このせりふの巧みな面白さとは、ことわざをめぐる慣習的な表現それ自体を解体し、比喩的意味を抑え、字義的意味をあえて表層に露呈させる面にあると言えるでしょう。

私は、英文学作品を読む場合に、作品の深い読みを行うには、こうしたイギリスのことわざについての知識が必須であることを痛感しています。

この度の「ことわざフォーラム2016」に参加させていただくことによって、イギリスのことわざだけでなく、その他の文化圏のことわざについても勉強させていただきたいと願っています。

本フォーラムが大変充実したものとなることを祈念し、歓迎のご挨拶とさせていただきます。

# 中国の学校におけることわざと成語の取り扱い

—中国朝鮮族小学校子供たちのことわざ習得に関する報告—

李 惠 敏

約180万人人口の中国の朝鮮族は東北三省（吉林省、黒龍江省、遼寧省）を中心に全国各地に分布している。そして東北三省（吉林省、黒龍江省、遼寧省）を中心に朝鮮族の地区には、朝鮮族学校と漢族学校があり、保育園から、小学校、中学校、高校まで朝鮮語で教育を行っている。

この度は中国朝鮮族の小学校（1年生～3年生）でのことわざや成語の取り扱いについて調査し、簡略にまとめた報告である。

中国の朝鮮族学校の子供たちは、小学校1年生から「朝鮮語文」と「漢語」の勉強が同時に行われる。また、英語の教育もしているので、小学校から3言語の勉強をしなければならない。もちろん地域や環境によるので、辺鄙な地域や田舎などにある小学校では、3言語ではなく、「朝鮮語文」と「漢語」の2言語になるが、中学校からはどの地域にでも外国語の勉強が始まる。そして高校での大学入試の時は必ず「朝鮮語文」、「漢語」ともう一つの「外国語」の試験を受けなければならない。

「朝鮮語文」と「漢語」の教材は共に延辺教育出版社朝鮮語文編集室と東北朝鮮文教材研究開発中心が共同に作り、延辺教育出版社で出版したものである。小学校（保育園）から高校まで朝鮮語で教育が行われ、「漢語」以外のすべての教材は朝鮮語であり、使用言語も朝鮮語である。

学校教育に小学校からことわざや成語の勉強を取り組んでいるので、子供たちは文字を覚えてからすぐに学校でことわざに接している。

例えば次の二つの書籍（『학생들을 위한 조선말 성구 속담 편람（学生たちのための 朝鮮語成句ことわざ便覧）』や『우리말 속담풀이（朝鮮語ことわざの解釈）』）はある学校の2年生の時に補助教材として使われたもので、分類の形であり、使い分けをしている。毎日授業の前に決まったことわざを



暗記し、作文にも必ずことわざを入れるという訓練をしていたようだ。

書名	出版社	固有朝鮮 成句	漢字語 成句	朝鮮語 ことわざ
학생들을 위한 조선말 성구 속담 편람	연변인민출판사	1,500個	800個	1,000個
우리말 속담풀이	료녕민족출판사			

中国の大学の入試には、四文字成語以外に点数の割合は非常に低いが、ことわざもでる。四文字成語は、小学校からずっと勉強しているが、ことわざは四文字成語と比べて教材より日常生活中での蓄積するのが多い。よって学生さんたちは試験対策に意図的に意識して覚えなければならない。

大学の入試の対策事情は漢族も朝鮮族も例外がない。故に小学校から四文字成語やことわざを教材に取り入れることは言語教育の基盤を作りあげることにつながる。そこで、朝鮮族の学生たちはどれくらいの諺や成語の勉強をしているかを調べてみた。

中国朝鮮族小学校の1年生から3年生までの「朝鮮語文」と「漢語」の教材を調べた結果、次のようだった。

朝鮮語文				漢語			
1～3年生		1学期	2学期	1～3年生		1学期	2学期
1年生	ことわざ		8	1年生	ことわざ		
	成語				成語		10
2年生	ことわざ	10		2年生	ことわざ	1	9
	成語				成語	50	58
3年生	ことわざ	5	4	3年生	ことわざ	36	30
	成語		6		成語	113	168

次は、小学校1年生の「朝鮮語文」と「漢語」の教材に出ていることわざや成語である。

「朝鮮語文」1年生2学期（재미나는 우리말／楽しい我々の言葉）

1. 시작이 절반이다 （始まりが半分だ／初めが肝心だ）
2. 그림의 떡 （絵の餅／絵に描いた餅）
3. 아는 길도 물어가라 （知っている道も尋ねて行け）
4. 소 잃고 외양간 고친다 （牛を失くして牛小屋を直す／泥棒をみて縄

をなう)

5. 수박 겉 핥기 (スイカの皮なめ／表面的に事を行うこと)
6. 길고 짧은것은 대보아야 한다 (長短は比べてみないと分からない)
7. 식은 죽 먹기 (冷めた粥を食べる／朝飯前)
8. 가는 말이 고와야 오는 말이 곱다 (往く言葉が美しくして還る言葉が美しい／売り言葉に  
買い言葉)

「漢語」1年生2学期(背一背／覚えよう)

坐井观天：井戸の中から天をのぞく。見識が狭い事の喩え／井の中のかわず。

山清水秀：山は緑したたり川は水清らかである。山紫水明。

万紫千红：花がいろどりに咲き乱れるさま。物事の盛んなさま。千紫万紅。

鸟语花香：鳥がさえずり花が香る。春の景色の形容。

花红柳绿：花が赤く咲き、柳が緑に萌える。

欢天喜地：狂喜する形容。

心明眼亮：物事を観察し善悪を見分ける能力がある。洞察力がすぐれている。

欢声笑语：楽しげな声や笑い声。さんざめき

眉开眼笑：相好を崩す。にこにこうれしそうな顔をする。

无边无际：際限がないことの形容

自言自语：独り言を言う。

# 口頭文芸ことわざからの学び 無文字社会ボンデイにおいて

高 村 美也子

東アフリカには、共通言語としてスワヒリ語が存在している。このスワヒリ語は、約2000年前から行われていたアラブ・ペルシア商人の東アフリカにおける交易により、アラビア語と東アフリカの言語であるバンツー諸語が混合してできた言葉である。現在ではタンザニアの国語であり、教授用言語でもある。一方、タンザニアには、約130におよぶ民族が存在する。スワヒリ語が拡大するまでは、各々の民族語が第一言語として使用されていた。しかし、これらの民族語の多くは正書法が確立されていない。正書法が確立されていない民族語は無文字の状態であり、各民族は、口頭伝承・口頭文芸を媒介して社会の規律を守ってきた。現在では、多くの民族語の使用は、減少している状況である。

本稿では、ボンデイのことわざを収集し、その意味を後世に残そうとした長老チャンバイ氏の試みから、ボンデイのことわざが何を教えようとしているのかを紹介する。

## ことわざ紹介

\*斜体はボンデイ語、( ) はスワヒリ語訳

1. *Mfā siyai nakosa mzisi.* (Afae njiani hakosi mzishi.)

道中で死んだ人には必ず助け人がいる

2. *Lago nkadinyiwa.* (Ago halinyewi.)

キャンプ場では排便されない

3. *Soni zimkoma moma.* (Aibu zilimuwa moma.)

恥じらいがヘビを殺した

4. *Kwajaa mtenda, Mtendwa nkajaa.* (Asahau mtenda, mtendwa hasahau.)  
 やった者はやっことを忘れるが、やられた者は忘れない
5. *Mhumiza mtamu nee mmany nidihiye.* (Auguzae ugunjwa ajua auguavyo.)  
 病人を看病している者こそが病状を知っている
6. *Mmwona Nkomba matakoo nee mumtambikia.* (Aliyemwona komba matakoo ndiye amtupiae)  
 ガラゴの尻を見た者こそが、ガラゴに投げた者
7. *Afunganya za kutemewa za kutema mwenye nkazidaha.* (Afungashae kuni za kutemewa, za kutema mwenyewe haziwezi.)  
 割られた薪を束ねるだけの人は薪割りができない
8. *Amogwaho mamba, mbuu aguuka mtoni.* (Anyolewapo mamba, kenge hukimbilia mtoni.)  
 ワニが毛を剃られたところで、オオトカゲは川に逃げ込む
9. *Ana fumba na wayo.* (Ana kiganja na wayo.)  
 手のひらと足の裏がある
10. *Ikachinjwa ni Kibwana sote tada.* (Akichinja Kibwana wote tunakula.)  
 首長が屠殺したら我々も食す
11. *Ekea ng'ombe uhongeze mwili.* (Achia ng'ombe usalimishe mwili.)  
 牛を放ち、体を守りなさい
12. *Bangii mwenga nkaikema ngele.* (Bangili moja mkononi hailii (ngele).)  
 ブレスレット一つでは音はならない
13. *Bea kuu doondezwa siku ya mbui.* (Buyu kubwa hutakiwa siku ya shughuli.)  
 大きなバオバブの木は、行事の日に必要なとされるもの
14. *Bude nee Mkuu ya ntambo.* (Bude mkuu wa safari.)  
 長老象は旅の長

15. *Bandubandu yabinda gogo.* (Bandu bandu yamaliza gogo.)  
一滴一滴 丸太を終わらす
16. *Usoo wa musu nkauna ufuti.* (Bao mchana halina uonevu.)  
昼間のチェスには悪事はない
17. *Chando chagia hae.* (Chanzo kimekosewa mbali.)  
始まりは遠くて間違えられた
18. *Chamwenzio chaigwa na chako.* (Chamwenzio huliwa na chako.)  
友のものはあなたのものによって食われる
19. *Chako ni chako chamwenzio cheza kio uchee (kio).* (Chako ni chako  
chamwenzio huja huchelewa.)  
あなたのものはあなたのもの、他人の物は遅れてくる
20. *Sukuzi da mwiwa ni mwiwa.* (Chipukizi la mwiba ni mwiba)  
とげの新芽もとげ
21. *Jula akakema mazi ni macheche.* (Chura akilia maji ni machache.)  
蛙が鳴くとき、水は少ない
22. *Masofi makuu yada na kio.* (Chewa wakubwa hula usiku.)  
大きなタラは夜に食べる
23. *Chuma kiema msani, mvuguti wonda ukidahe?* (Chuma kilichomshinda  
mhunzi, mwanagenzi utakiweza?)  
鍛冶屋を困らせた鉄、弟子は作ることができるのか?
24. *Mzigi (Uganga) wa mbuzi ni kunoa.* (Dawa ya mbuzi ni kunoa.)  
ココナッツの削ぎ器ムブジの葉は研ぐこと
25. *Mgosi wa chura kutumbaa ne kwekaa.* (Dume la chura kuchuchumaa  
ndiyo kukaa.)  
カエルの雄のかがむ姿勢こそが座っている姿勢
26. *Kaa dakomwa ni tionana tionana.* (Duma huuliwa kwa kukuru  
kakara.)  
チーターはやつとのもので殺される
27. *Kaa mwana mwenzio ni mboga?* (Duma mtoto wa mwenzio ni

mboga?)

仲間のチーターの子どもは獲物？

28. *Mzizi (Mganga) wa usuzi ni mate.* (Dawa ya ushuzi ni mate.)

屁の薬はつば

29. *Mwita mtoni nee mmwona jula.* (Aendae mtoni ndiye anuonae chura.)

川に行く人こそがカエルを見る者

30. *Mwenda na kio nee mng'umwa.* (Endae usiku ndiye atetwae.)

夜に行く人こそ反論されるもの

# 『カンタベリー物語』の庶民とことわざ

武 田 勝 昭

## 『カンタベリー物語』の概要

チオーサー（Geoffrey Chaucer 1343年頃－1400年）は裕福なワイン輸入業者の家に生まれ、長じて宮廷に仕えた。税関、外交などに従事し、また出征して捕虜となるなど、その生涯は波乱に満ちたものであった。

代表作『カンタベリー物語』（*The Canterbury Tales*, 以下 CT）は、聖地カンタベリーに詣でる巡礼たちがロンドンの宿から馬に乗って出立するところから始まる。先導役の宿の主人の提案で各々が昔話を語って旅の無聊を慰めることになる。チオーサーは物語の聞き手でありまた語り手ともなる。さらに折に触れ作者として読者に語りかける。巡礼の顔ぶれは多彩で宿の主人は「**すべての階級**（*alle degree*）の人たち」（「教区司祭の話の序」）が語る話を聞くことがきたと喜ぶ。とはいえ、その中に人口の大半を占める農民がいないのが惜しまれる。ここでは**庶民**として粉屋、家扶、料理人、賄い方、錬金術士の徒弟などの他に、免罪符売り、召喚吏などの世俗にまみれた宗教者を指すものとしたい。

巡礼が語る24話はヨーロッパの各地で流布した作品を翻案・翻訳したものが大半を占める。その出典は古典から同時代の作品まで幅広い。

## 粉屋と家扶の掛け合い、バースの女房の結婚譚

「粉屋の話」と「家扶（荘園の管理人 *reeve*）の話」は西洋の落語とも言われるフランスの笑話**ファブリオ**（*fabliau*）を焼き直したものである。騎士が宮廷愛の物語を話し終えると、酔っ払った粉屋が、学僧に女房を寝取られる大工の話を切り出す。それを家扶が制止する。女房持ちの彼はもと大工だったからである。粉屋はかまわずことわざで皮肉る。

(1) Who hath no wyf, he is no cokewold. / But I sey nat therefore that thou

art oon (女房のないものなあ女房に不義をされる心配はねえ。そこでじゃ、  
わっしはお前さんが女房に不義をされたと言ってるんじゃないぜ)「粉屋  
の話」(日本語訳は梶井迪夫訳『全訳 カンタベリー物語』、以下同様)  
一同の前で虚仮にされた家扶も黙ってはいない。

- (2) …I answere, and somdeel sette his howve, / For leveful is with force  
force of-showve (…あいつの話に応じて少々小馬鹿にしてみせますけど。  
力には力で仕返するのが理に叶っておりますからな)「家扶の話の序」  
こう挑戦状を叩きつけて同じくファブリオで反撃に出る。学僧から粉をくす  
ねた粉屋が、女房と娘を寝取られる話である。

バースの女房は負けん気が強くておしゃべり好き。「この世の中に権威あ  
る本がなくなったって、結婚生活の悩みを話すのに私には経験だけでほんとう  
に十分ですわ」「十二歳になったときから…わたしは教会の扉の前で夫を五  
人も迎えたんですよ」(「バースの女房の話の序」)。その乱杭菌(好色のしる  
し)の猛女が気炎を吐く。テーマは恋の手練手管、今風に言えば(女)性の  
解放。

- (3) Yet was I never withouten purveyance / Of mariage, n'of othere  
thynges eek. / I holde a mouses herte nat worth a leek / That hath but  
oon hole for to sterte to, / And if that faille, thanne is al ydo. (でも、わ  
たしにだって結婚のことやほかのことに計画がなかったわけじゃないんで  
すから。わたしは駆け込んで行くのに一つの穴しかなくて、もしそれが失  
敗すれば皆おじゃんになってしまうような二十日ねずみの気性なんか一顧  
だにしないんです)

- (4) The wise astrologien, Daun Ptholome, / That seith this proverbe in his  
Almageste : / "Of alle men his wysdom is the hyeste, / That rekketh  
nevere who hath the world in honde." (…かの賢い天文学者トレミー一師  
です。彼はあの『天文学大全』の本の中でこんな諺を言っています。「誰  
がこの世界を手中に治めるかなどちっとも構わないような人の知恵こそす  
べての人のうちで最高である」と)

856行に及ぶこの前口上につづいてバースの女房が語るのは、同じく結婚を



テーマとする408行の翻案の物語である。語り手の強烈な個性、独創性が影をひそめるのも無理はない。

### 「ことわざ」と「格言」

ことわざと格言の弁別は現在のことわざ研究では繰り返し話題にのぼるが、チョーサーをはじめ当時の知識人は頓着しなかった。ただ、当時のことわざを知る上で、両者を比較検討することにはそれなりの意義がある。本発表の課題に関しても語彙、音韻、比喩、用法などの違いが手掛かりとなる。

Bartlet Jere Whiting, *Chaucer's Use of Proverbs* (1934) は、チョーサーの全作品から（広義の）ことわざを網羅的に収集し、それらを（狭義の）**ことわざ** (proverb 総数187)、**成句** (proverbial phrase 総数630)、**格言** (sententious remark 総数421) に分類した。たとえば、先に引用した(3)はことわざ、(4)は格言に振り分けてある。ただし、Whiting は分類の基準を明記しておらず個々の弁別にも疑問を挟む余地がある。Cameron Louis (*Proverbium* 14 : 1997掲載論文) は Whiting の意図を批判的に汲み取り、弁別基準として**表現形式**、**典拠の有無**、**認知の難易**、**道徳／宗教**を加味し、**庶民ことわざ** (folk proverb)、**教養ことわざ** (educated proverb) の呼称を提唱している。Louis は庶民ことわざと教養ことわざの間に、古英語と中英語のせめぎ合い、俗と聖の確執を読み取る。

庶民と教養の弁別は、そのまま CT の24の物語の弁別に通じるものがある。粉屋や家扶の笑話、バースの女房の結婚譚を一方の極とすれば、もう一つの極は古典の引用・格言で固めたチョーサーの語る「メリバウスの物語」、訓話で固めた教区司祭の語る「七つの大罪」の話である。語り手にあらゆる階級を揃えたことは、あらゆる階級の読者のニーズを想定した作者の策略でもあっただろう。

### 修辞学、メタ言語

『カンタベリー物語』が書かれた時代は**修辞学** (rhetoric) への関心がかなり高かったようである。説教の技量を磨くことは僧侶たちにとって死活問

題であった。そのため、人気のあった説教術の指南書にことわざの用法を述べたものがあつたことも知られている。

修辞学のイロハは僧侶ばかりでなく、世俗の人々もひとかどの人物と認められるための要件であつた。郷土（下級地主 franklin）は謙遜して次のように言う。「わたしはパルナッソーの山の頂きで眠つたことも…マルクス・トゥリウス・キケロの修辞を学んだこともございません。もちろん、修辞学（rethoryk）の色合いなんぞは一つも心得ておりません」（「郷土の話の序」）。

また、「トパス卿の話」を語るチョーサーを宿の主人が制止して言い募る。「もう詩はごめんだわい。何か**韻文**で話ができるなら、そいつを話してくれよ。それとも何か**散文**で話してくれよ」。これは作詩法の変化及び韻文から散文への転換などが、当時の人々の話題に上つたことを示唆している。

言文一致について語つたチョーサーの**メタ言語**（metalanguage 言語で言語を語ること）もある。「誰でもある人の言うとおりに話さなければならない場合、（中略）たとえ、その人がどんなに野卑でみだらなことを話しても、一語一語できる限り言つたことに近いように繰り返さなくてはなりません」（「総序」）。

ことわざもまた、これらの英文学・英語学史上のテーマに深い関わりをもつものであつた。

# ことわざの現在

北 村 孝 一

## ことわざの風景2016

2016年、世間の注目を最も集めたのは「小池劇場」でしょう。東京都知事選に先出しジャンケンで登場した小池百合子氏は、たちまち主役に躍り出て、圧勝。知事就任後も築地市場の移転延期、オリンピック競技場の見直し…と話題が途切れず、今後も目を離せない展開です。そこには日本社会が抱える問題がいくつも露呈していますが、ここでは、ことわざに話を絞みましょう。

小池氏は「崖から飛び降りる覚悟」で出馬したというのですが、従来なら「清水の舞台から飛び降りる覚悟」というところです。古風な表現が氏のイメージに合わないにしても、もう少し言いようがあるのでは、と感じました。これに対し、対立候補の増田・鳥越両氏が何と言うか注目していると、やれ私はスカイツリーからだの、いや富士山だのと言い出す始末で、三者の言語感覚の鈍さに拍子抜けしました。

その前後には、鳥越氏擁立を「怪我の功名」と評したり、民進党の岡田氏の代表選不出馬に「寝耳に水」の声があがるなど、ことわざを引く新聞記事が続きました。そして、その陰で幹旋収賄疑惑で大臣を辞任した甘利氏の活動再開のベタ記事がありました。事件は晴天に霹靂で、寝耳に水だったと、紋切り型の本人の談話がまとめられています。ことわざが通り一遍の決まり文句として使われる事例です。

## ある日の新聞から

次に、これというトピックスのない日で、ことわざが目についた新聞（朝日9月30日朝刊）を読み返してみました。ことわざは、「三度目の正直」（国産初のジェット旅客機が三度目によりやく訪米に出発）と「急いてはことを仕損じる」（「築地市場移転を急がないで」と題した投書）の二つ。前者は軽

い常套句的な用法ですが、後者は高校生がことわざを引いていて、新鮮な印象でした。そのほか、社説余滴の「辺野古判決への疑問」では、米軍基地の沖縄集中にふれ、米国の専門家は「卵を一つのかごに置いておけば（すべて割れる）リスクが増す」と指摘している、とあります。こんなところに、英語のことわざ Don't put all your eggs in one basket. が顔を出しているんですね。

たまたま出てきた三つの表現ですが、図らずもことわざの現在の状況が象徴的に現れています。

すなわち、第一の例は、マスコミに登場することわざの多くが決まりきった常套句として見出しなどに使われることです。特に深い意味はないけれど、読者の注意を引きやすいので多用されます。第二の例は、現代の若者が意外にことわざに関心を持ち、時には積極的に使う場合もあることを示唆しています。私は、学習院大学の授業（ことわざの世界）で受講生が毎年百名を越え、若者のことわざに対する関心の高まりを実感しています。

また、第三の英語の例は、ことわざが民族や言語を越えて浸透する現象の一端を示しているのではないかと思います。日本語には、明治時代から「溺れる者は藁をもつかむ」などの西洋のことわざがかなり入り、その一部はしっかりと定着していますが、今日では、「手が冷たい人は心が温かい」といった俗信を含め、「豚に真珠」などのことわざが特に西洋起源と意識されずに受容される傾向があります。

## TV 番組と入試問題

ところで、近年のテレビでは、タレント主体のクイズ番組がむやみに多いですね。制作費が安く上がるせいともいわれますが、そこにことわざを素材にした問題がよく登場します。ことわざを挙げ、三択などで意味を選ばせるのが基本で、穴埋め問題や英語のことわざをからめたものなど、さまざまなものがあるようです。バラエティの一種とみれば、あまり目くじら立てることもないのですが、いささか気にかかるのは、ことわざを実際に使う場面がほとんどなく、ことわざのテキスト（本文）と意味をもっぱら知識として問

うことです。これでは、たとえ全問正解しても、ことわざの知恵を身につけたり、その鋭い批判精神やユーモアを解することにはつながらないのではないのでしょうか。

この点は、中学・高校の入試問題もほぼ同様です。近年は受験勉強でことわざを覚えたという学生が多いのですが、単に意味を暗記することに終わっては、本当にことわざを身につけることはできないでしょう。

ことわざは表層のことばと比喩的な意味の隔たりが大きく意外性があるので、クイズでも試験でも取り上げやすいわけですが、もう少しじっくりことわざを味わい、感覚的にも身につけるための配慮が必要だろうと思います。

### ことわざを知らない若者たち

学生が教授をパーティに招待しようとして、「枯れ木も山の賑わいですから」と書いたという話がよく知られています。これは、招待された高齢者がみずから謙遜して「枯れ木も山の賑わいだから、私も出席しましょう」と言うのならよいのですが、主催者側が招待する方を「枯れ木」にたとえては、失礼なことはいうまでもないでしょう。以前、関西で聞いたものでは、「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」と言ったら、「今朝まで」と勘違いされてあきれた、という話がありました。

私の授業でも、学生にことわざの用例を書かせると、思わず笑ってしまうようなもののがかなり出てきます。たとえば、「怪我の功名」で用例を書きなさいというと、交通事故で負傷して入院したら、きれいなナースさんに看病されて、怪我の功名だったという類です。このことわざの「怪我」は、失敗とか過ちの意で、今日一般に使われる傷を負う意ではありません。ただし、たまたま負傷したことが、何かよい結果に結びついたときに、両者をかけて冗談めかしていることはあります。しかし、学生たちは、怪我イコール負傷と思い込み、ジョークではなく真面目に書いてくるので、困ってしまうわけです。「住めば都」も、都と地方（田舎）の対比ではなく、狭く汚いアパートでも住めば都だといった用例が少なからず出てきます。

中高年の目からみると——私も七十になりましたが——、最近の若い者は

ことわざを知らない、言葉遣いがわかってないということになりますが、私は、そういう昔ながらのぼやきを繰り返すのではなく、ここにも〈ことわざの現在〉をとらえるヒントがあるのではないかと考えています。

### 遠近法で見る〈ことわざの現在〉

〈ことわざの現在〉ということで、ここまで、さまざまな〈ことわざの風景〉を挙げて、その特徴を指摘してきましたが、おおまかには、次の四つにまとめてよいでしょう。

1. ことわざを単なる決まり文句として使う傾向。
2. ことわざをよく知らない若者が多いが、関心を示す若者もいる。
3. 異文化のことわざがいまも日本語に入ってきている。
4. ことわざをテキスト（ことわざの本文）と意味のセットとしてのみとらえる傾向。

では、こうした特徴の背後に、何があるのでしょうか。〈現在〉というのは、われわれがその渦中であって、なまじ知っているだけに、かえってとらにくいものがあります。「灯台もと暗し」で、近いものほどむしろ見えない面がありますから、意識的に少し引いて、遠近法によって、ことわざを眺めてみましょう。

先ほど挙げた四つの特徴をあらためて見直すと、じつは、その多くは、ことわざの本質に根ざしています。

ことわざは、状況にふさわしい適切な使い方をすると大きな力を発揮しますが、昔から紋切り型の決まり文句を並べる人もいて、後者はまたかとかくびの一つも出てきそうです。若者がことわざをよく知らず誤解する一方で、関心を持つのも、長い目で見ればよくあることでしょう。私自身も最初は誤解していたことわざがいくつもありました。誤解の原因は、古い語彙や語法もありますが、ことわざが比喩を多用し、根本的には、解釈を想像力にゆだねるメカニズムがあるせいでしょう（同時に、社会的な慣用によって解釈がかなり安定しているわけですが、この想像力が働く要素が欠けると、ことわざの魅力は失せてしまいます）。また、海外のことわざは、古くは主に中国

から、江戸後期からは西洋のものが入ってきたことが明らかとなっています。ことわざは、言語文化の粋ともいわれますが、同時に言語や国境を超える国際性も併せ持っているのです

このようにみえてくると、四つの特徴のうち残るのは、最後の4の「ことわざをテキスト（ことわざの本文）と意味のセットとしてのみとらえる傾向」です。前に述べたように、クイズや試験問題に顕著に表れていますが、これだけは他とかなり異質で、最も現代的といえるかもしれません。

これは、ことわざを単なる知識として扱うもので、その結果、ことわざを使う場面やユーモア、批判や笑いといったコミュニケーションの機微はほとんど欠落してしまいます（文部省の学習指導要領にも、ことわざが取り上げられていますが、故事成語と同列で、単なる知識としての扱いは変わりません）。そして、その裏には、ことわざを生きた形で伝承する場が失われている現実があるのではないのでしょうか。若者のことわざの誤解や誤用が以前よりも目につくのも、伝承の場の問題と関わりがあるでしょう。

すでに多くの方が指摘していることですが、高度成長期に日本の伝統的コミュニティは崩壊の道をたどり、多様な人々が日常的に会話する機会がいちじるしく減少しました。少子化で年齢の異なる子ども同士が遊びを通じて交流することも稀になってきました。さらに、テレビやパソコン、スマホなどが日常生活に浸透することによって、コミュニケーションはますます劇的に変容しています。

とはいえ、私は必ずしも悲観的ではありません。「満つれば欠くる」で、極端な一方向の動きは、どこかで揺り戻しがくるでしょう。ただ、そのためには、私たち自身が社会の大勢に流されず、それぞれの場で生き生きとしたコミュニケーションを求めていくことが必要です。

雑駁な話になりましたが、これからも批判精神やユーモアを失わず、言語感覚をみがき、ことわざを味わうゆとりを回復してゆくことを願っております。

# 「庶民の暮らしとことわざ」

森 田 登代子

## 一. 近世後期、女子ども向けの遊戯具としてかるたが一般的

当時の進物のマニュアル書『進物便覧』（文化8年・1811）からも裏付けられる（『進物便覧』岩瀬文庫・大阪府立図書館蔵。袖珍版。版本の奥付から大坂・江戸に広く普及）。

・「疱瘡見舞」の欄には「疱瘡見舞に第一嫌物は紫いろなり誰しも心付かざるはあらねど時に取てはわすることあり無事なるときはよろし変事有るときは気の毒也菓子るい江戸錦絵画本の袋など随分気を付べし」（六〇丁）との説明あり。かるたの掲載なし。

・「<sup>としだま</sup>年賜」百人一首（六丁オ）

・「<sup>かづきぞめ</sup>被衣始（帯解・紐解）」の項に「百人一首」（廿七丁ウ）

・「手習始」の「<sup>にょし</sup>女兒へおくり物」の項では「哥がるた」（三〇丁オ）

→かるたは一九世紀の初頭以前より女兒への贈答品として普及していたと推察される。

## 二. かるたは子どもの進物用に登場

京都の薬種問屋（屋号近江屋）岡田伝兵衛が残した文書内に「稲万福寿録」（かぞえ八歳の娘稲が疱瘡に罹り平癒するまでの状況を記す）。見舞進物品の中に「むべ山歌かるた」「たとへかるた」二種類含む（文政元年（1818）霜月21日）（拙著『近世商家の儀礼と贈答』）

## 三. 江橋崇『かるた』（法政大学出版局・平成27）

庶民の娯楽遊戯に上方系の古い譬を用いる「いろは譬合せかるた」が中期流行。年少の子ども向けに親や祖父母が購入、家庭内で大人が子どもをあやして一緒に遊ぶ玩具。かるたはいろはの文字を教育する教材として好適。江



戸方面では木版印刷の技術を取り入れ、「張抜き」「縁返し」の製作技術が発達していた京都・大坂を凌駕するようになる。女子どもの遊びに「絵合せかるた」「いろは譬合せかるた」が普及。明治以降、児童教育の教材という側面にかかるたの需要あり。全国各地の中流以上の家庭で好まれて大流行。かるたは子ども向け「いろはかるた」の領域に留まらず、教育勅語発布（明治23年）を契機として学校教育に取り込まれる。遊びの文化から知育へ移行。

#### 四. 肥田皓三「近世大坂の絵本」「大阪のいろはかるた」（『上方学芸史叢攷』（青裳堂書店・昭和63）や牧村史陽編『大阪ことば事典』（講談社・昭和54）からは、江戸とは若干異なり上方の独自性を持ったいろはかるたの存在（肥田先生所蔵のかるたから）

- ①絵札と字札を一枚の刷り物にし、かるたの裏に力紙用の紙を貼る。縦四分分割×横一二分割の四八分割、もしくは縦八分割×横六分割の四八分割に切る。現在のかるたに比べ小さいサイズ（3.5×2.5cm、4×2.5cm、双六タイプは5.5×5cm）である。
- ②三の指摘通り、文字を自然に覚えるのにかかるたは重宝、教育玩具の機能のほかに、地域的特性。上方独特の漢字の読み方、生活上の特徴を込める（添付資料。肥田先生所蔵かるたより）。
- ③幼児の様々な遊び本『幼稚遊昔雛形』（天保15年・1843、万亭応賀著・静齋英一（英泉）画・岩瀬文庫蔵）に、「竹がへし」「きしやごはちき」「お手玉」が図示する姿態でかるた取りをしたのではないか。いわゆる茶の湯の「御道具拝見」の格好に似る（「はいぶし」）。同じかるたでも『絵本池の蛙』（延享4年・1747）にみられるヨミの遊技や合せの遊技（博打）では、トランプのばば抜きと同じ姿態である。現在でも、かるたや百人一首を畳の上に撒けば、少し前屈みになって札を捜す。江戸時代のおぶりのかるたは、より近距離で絵札を捜す。『幼稚遊昔雛形』のような、「はいぶし」に近い状態でかるたとりに興じた？そうではなく、切らずに一枚物のまま遊んだということもあるいは考えられる？

# 言語面から見た東西いろはかるた

佐 竹 秀 雄

## 1. ねらい・調査対象・分析の視点

庶民の暮らしとことわざの関係は、常識的には、「ことわざは庶民の暮らしの中から生まれるものであり、ことわざには庶民の暮らしが反映されている」と捉えられよう。その立場からすれば、ことわざを分析することによって庶民の暮らしのありよう、生活や行動、さらには生き方に対する意識が読み取れるはずである。

ここでは、その常識的な線に沿って、ことわざを分析して庶民の意識に近づいてみようと思う。ただし、対象とすることわざを江戸と京の「いろはかるた」とし、分析の視点を「言語」とする。東西のいろはかるたを扱うのは、あわよくば、東西の人々の比較ができればという思いからである。なお、分析の対象とするいろはかるたは、様々な変遷や変化があるとのことなので、特にこだわらず、比較的元の形に近いと推測されるものを選んだ。

## 2. 単語から見たいろはかるた

江戸と京のいろはかるた各48のことわざを単語に分割し、自立語だけを集計した。その結果の、全体の異なり語数と延べ語数、および、延べ語数の品詞別の度数を次に示す。

( ) 内は%

	異なり	延べ	名詞	動詞	形容詞	形容動詞
全 体	253	299	219 (73.2)	71 (23.7)	6 (2.0)	3 (1.0)
江 戸	143	156	106 (67.5)	43 (27.4)	4 (2.5)	3 (1.9)
京	132	143	113 (79.0)	28 (19.6)	2 (1.4)	0 (0.0)

異なりと延べの数に差が小さいのは、使用語彙に偏りが少ないことを示している。実際、東西別に集計した度数上位の語は次の通りで、4度以上出現した自立語はなかった。

江戸：身・もの（以上3）、あり・隠す・子・尻・する・出る・念・夢・  
世（以上2）

京：縁（3）、言う・鬼・先・下・種・身・水・論語・笑う（以上2）  
品詞別において、名詞比率が高いことは要約的表現、非説明的表現が多いことを意味する。これはことわざの性格上、当然のことであろう。それはともかく、名詞の比率が、東より西のほうが高いことには意味があるのだろうか。

語の意味分野では、「釜・針・鉄砲・瓢箪」など広い意味での道具が23語（24度）、「子・亭主・盗人・律儀者」など人間関連の語が16語（18度）、「身・尻・泣きっ面」など身体関連の語が14語（21度）見られた。日常的との観点から多いのでは予測される、食関連の語は動詞「煮える・食う」を入れて7語（8度）であり、金銭関連も「貧乏・安物」を入れても6語（6度）に過ぎなかった。食やお金に関する意識は、現代とはかなり違っていたとも考えられる。

### 3. 内容の性質から見たいろはかるた

ことわざは、それぞれ表現している内容に性格の差を認めることができる。例えば、暮らしにおける一場面をたとえるのにふさわしいことわざ、あるいは、世の中のありようや人の行動の傾向を指摘するのに適したことわざなどがある。もちろん、同一のことわざが異なる場面で使い分けられることもあるが、そのことわざの主たる役割という考え方で分類した。

	状況の描写	指摘 世間	指摘 人間	教訓	その他
江戸	15 (31.3)	12 (25.0)	8 (16.7)	12 (25.0)	1 (2.1)
京都	22 (45.8)	10 (20.8)	9 (18.8)	6 (12.5)	1 (2.1)

例 状況の描写：身から出た錆、立て板に水、聞いて極楽見て地獄

指摘（世間）：憎まれっ子世にはばかる、氏より育ち、一寸先は闇

指摘（人間の行動）：花より団子、雀百まで踊り忘れず

教訓：義理と禪は欠かさね、油断大敵、念には念を入れよ

教訓的なものが意外に少なく、現実の場面・状況を描写するものが多い。

#### 4. イメージから見たいろはかるた

表現されている事柄によるイメージという点から眺めてみる。

例えば、「糠に釘」「猫に小判」「頭隠して尻隠さず」は、無意味な振る舞いであり空しい。「無理が通れば道理引つ込む」「地獄の沙汰も金次第」である世の中は不愉快だし、「骨折り損のくたびれ儲け」「目の上の瘤」は腹立たしい。「安物買いの銭失い」「年寄りの冷や水」は情けない。「泣きっ面に蜂」「臭いものに蠅がたかる」のも困ったことである。

いろはかるたを眺めていると、このようなマイナスイメージのものが多く。評価者によって判定が異なることを考慮に入れても、40句以上に上りそうである。それに対して、プラスイメージのものは「笑う門には福来たる」「梅檀は双葉より芳し」など多く見ても15句ほどである。

#### 5. いろはかるたにおけることわざの役割

かるたのことわざに、なぜマイナスイメージのものが多くのか。素直にとらえれば、庶民の暮らしがそれだけ甘くないことを示していると言えよう。また、人生や行動・態度におけるマイナス事項の指摘は、そのようにしない、ならないようにとの注意を喚起する役割を果たす。「安物買いの銭失い」から、安物買いの戒めを読み取ることは容易である。

ことわざの大きな役割として、他人を説得し、あるいは、自分を納得させることが挙げられる。そのような場面で使われるものとしては、厳しい事実の指摘が有効である。世の中や人々の目は厳しいのだから、「それに耐えていかねばならぬ」と説得して励まし、あるいは「仕方がない、諦めよう」と自分を納得させることができる。

要約的で非説明的なことわざは、解釈の自由度が大きい。楽ではない庶民の暮らしの中で、マイナスなイメージのものは、自分たちの暮らしにたとえやすい。そのとき、解釈の自由度の大きいことは、都合のよい解釈と納得をもたらす。いろはかるたにおいて、ことわざは庶民の暮らしの実感を背景に、説得・納得の役割を存分に発揮できたのではないか。

# 内海桂子のことわざ観と創作ことわざ

永 野 恒 雄

内海桂子師匠（1922～）の『七転び八起き人生訓——ことわざは私の“師匠”だった』（主婦と生活社、1991）は、計65のエッセイからなるが、すべてのエッセイが、「ことわざ」をタイトルにしている。

それら「ことわざ」の集合は、子ども時代からの長い芸能生活を反映して、一定の特徴と傾向を持っている。これらの「ことわざ」について分析しながら、「庶民の生活とことわざ」という問題を考えてみたい。

以下に、65のエッセイのタイトルとなっている65のことわざを列挙する。番号のあとの記号は、そのことわざの特徴を説明するために付したもので、\*は、内海桂子師匠による「創作ことわざ」と思われるもの、+は、古典あるいは故事成語に由来するもの、△は、川柳、狂歌、都々逸などの全部または一部、を示している。？は、由来がわからなかったもので、これらの記号のないものは、一般に流通している「ことわざ」である。

- 1 遠くの親類より近くの他人
- 2 \* 年寄り二階へ上がらず
- 3 + 声梁塵を動かす
- 4 犬も歩けば棒に当たる
- 5 犬も朋輩<sup>ほうぱい</sup>、鷹も朋輩
- 6 娘に甘いは親父の習い
- 7 得難きは時、会い難きは友
- 8 稼ぎ男に操り女
- 9 ? 月雪花に琴に三味線
- 10 芸は売っても身は売らぬ
- 11 心ばせを笹の葉に包む

- 12△ 筍の子は生まれながらに重ね着で 育つにつれて裸にぞなる  
13 暑さ寒さも彼岸まで  
14 角を矯めて牛を殺す  
15 氏より育ち  
16 遊びに師なし  
17 貧にして楽しむ  
18 商いは門々  
19 八百屋に看板無し  
20△ 江戸っ子は五月の鯉の吹流し 口先ばかりではらわたは無し  
21△ 手に取るな、やはり野におけ蓮華草  
22 心に哀<sup>あい</sup>を思えば涙双眼に浮かぶ  
23 塵も積もれば山となる  
24 年寄り<sup>としより</sup>は家の宝  
25 七つ八つは憎まれ盛り  
26 良薬口に苦し  
27\* 食わずに死なないで食い過ぎて死ぬ  
28 女の三従  
29 儲かりませんで蔵が建ち  
30 袖すり合うも他生の縁  
31 江戸の履き倒れ 江戸の飲み倒れ  
32 付け焼き刃は剥がれ易い  
33+ 来たる者は日々に親し 去る者は日に以て疎く、来たる者は日に以て親し  
34 入るを量りて出るを制す  
35 笛吹けども踊らず  
36 果報は寝て待て  
37 泣きながら良い方を取る形見分け  
38 おごる平家は久しからず  
39+ 天地は万物の母 無名は天地の始めなり。有名は万物の母なり（老子）  
40 十把ひとからげ

- 41 己が女房にちょっと惚れ  
42 当て事とふんどしは向こうから外れる  
43 子供は風の子  
44 一寸の虫にも五分の魂  
45 猫にまたたび、泣く子にお乳  
46 女賢しゅうして牛売りそこなう  
47+ 機を見て人を制す 先んずれば人を制す  
48 三代続けば末代続く  
49 老いの入り舞い  
50+ 母の愛は海より深し 父の恩は山よりも高く母の恩は海よりも深し(童子教)  
51? 洒落るはてんでの口拍子  
52\* 職人の腕知らず  
53 聞くは一時の恥、聞かざれば末代の恥  
54 爪の垢煎じて飲む  
55△ 身は揚羽の蝶に変われども昔の毛虫を忘れるな (都々逸)  
56 芸は身を助ける  
57 蛙の子は蛙  
58 鉄は熱いうちに打て 矯めるなら若木のうち  
59 弘法筆を選ばず 弘法でないなら筆を選べ  
60 親の光は七光  
61 石の上にも三年  
62 寄らば大樹の陰  
63+ 身の内の財は朽ちることなし 倉内財有朽身内財無朽(実語教)  
64\* 髪は高く結い、気は低く持て  
65+ きりんも老いれば駄馬になる 麒麟も老いれば駄馬に劣る(風姿花伝)

(注) 以上か、あくまでも口頭発表を前提とした資料なので、説明が至らない点は、ご容赦いただきたい。

## Ⅱ．言語文化研究所シンポジウム 「ネーミングのコトバ学」





# 言語文化研究所シンポジウム「ネーミングのコトバ学」

## 1. シンポジウム「ネーミングのコトバ学」の開催にあたって

玉 井 暉（言語文化研究所所長）

武庫川女子大学言語文化研究所は、昨年度（2015年度）に開催したシンポジウム「言語文化の諸相——注釈、翻訳、翻訳語」を受けて、言語文化についての総合的研究の第2弾として、本学の特別学期公開講座との共同企画により、「ネーミングのコトバ学」と題するシンポジウムを企画いたしました。言語文化研究に従事している専門の研究者や大学院生・大学生だけでなく、広く言語文化に関心をもっている一般の市民の方々にもご参加をいただき、言語文化のもつ豊かな意味を多方面から多面的に考えていきたいと存じます。

今度のシンポジウムは、第1部と第2部から構成されています。

まず第1部では、講演形式（公開講座）をとり、3人の講師が、「ネーミング」についてそれぞれの関心にもとづいて問題提起をいたします。その講師とテーマは次の通りです。

### 1. 「外国文学作品の翻訳タイトルの付け方」

玉井 暉（言語文化研究所所長）

### 2. 「人気ブログのタイトルに見られる工夫」

岸本 千秋（言語文化研究所研究員）

### 3. 「お名前物語」

佐竹 秀雄（言語文化研究所研究員）

第2部は、これらの3人の講師による講演内容を踏まえ、本学の言語文化研究所所属の研究員全員の参加により、会場の聴衆の方々をも交えての討論の会となります。柴田清継研究員は漢文学・中国文学の観点から、設楽馨研究員は現代日本語の分野から、富永英夫研究員は英語学・言語学の立場から、山崎洋子研究員は教育史の分野から、それぞれ「ネーミング」についての見

解を披露します。

「ネーミング」に関わる言語文化は、文学・絵画・音楽などの芸術世界におけるタイトルの付け方や、国家の名前、企業名や店舗の名前、新製品の命名、イベントのタイトルの付け方、広告業界の活動などの社会的側面においてだけでなく、子供や人の名前の付け方、ニックネームや愛称などの個人的な側面にいたるまで、人間生活の広範な世界に深く浸透しています。このような観点から、「ネーミングの問題」は言語文化研究においては極めて興味深く、重要なテーマであると考え次第です。本シンポジウムにおいて稔りある議論が展開されることを期待しています。

## 2. シンポジウムの発表要旨

### 1) 「外国文学作品の翻訳タイトルの付け方」 玉井 暉

イギリスの文学作品を日本に紹介する時、そのタイトルをどんな日本語に置き変えたらよいのか、悩むことがしばしばあります。明治になって、多くの外国作品が入ってきた時、先輩の翻訳者も悩みました。でも見事な日本語を当てて翻訳した例が、シェイクスピアの作品名やブロンテ『嵐が丘』をはじめ、たくさん残っています。そのような例を紹介して、外国から新しい文学作品が入ってきた時のネーミングの仕方について考えてみたいと思います。また逆に、日本の文学作品を英語（外国語）に翻訳する時どんなタイトルをつけているのか、村上春樹の小説などを例に挙げて触れてみたいと思います。

### 2) 「人気ブログのタイトルに見られる工夫」 岸本 千秋

ブログは「インターネット上に日記形式で個人で書き込めるウェブサイト」という説明がされる。つまり、基本的には「個人の日記」である。しかし、ほとんどのブログにはタイトルが付けられているし、一日ごとの日記にもタイトルがある。また、ブログを集めたサイトでは、どれほど多くの人が見に来ているかをランキング形式で表しており、人気のあるなしも競っている。その人気のバロメーターを「タイトルの名付け」から探してみたい。

3) 「お名前物語」 佐竹 秀雄

第1話 自分の名前がとてもイヤで、改名を考えた女性、亀子の運命は？

第2話 「林檎」「柚」「梨紗」、3人の20代女性から、探偵は偽名の詐欺師をいかに見破ったか？

第3話 1993年、長男に「悪魔」と名づけた親がいた。それが巻き起こした一大騒動とは？

など、名前にまつわる話題をとりあげ、暮らしに必要な、名前に関する基礎知識を紹介します。名づけのルールと名づけ親の気持ちとのズレの問題を考えましょう。将来、子供に名前をつける参考にしてください。

# ネーミングと訳語選択

## ーコトバ学への一つのアプローチー

山 崎 洋 子

### はじめに

言葉（言の葉）を「コトバ」とカタカナ表記する仕方、それを学術レベルにまで高めようとする「コトバ学」。平成28年度の公開講座は、このコトバ学にアプローチするためのトピックとして「名づける」という行為をカタカナ表記した「ネーミング」に焦点を当てたものであった。このネーミングという行為に迫るためのアプローチには、どのようなものがあるのだろうか。この問いに対して、さし当たり「それは多様かつ多角的に存在する」と即答することが許されるであろう。そのことは、公開講座の三者の報告、すなわち佐竹秀夫先生の「お名前物語」、玉井暲所長の「ネーミングのコトバ学ー外国文学作品の翻訳タイトルの付け方」、そして岸本千秋先生の「人気ブログのタイトルに見られる工夫」といった報告タイトルが如実に示している。それゆえ、本コメントにおいても、筆者なりのアプローチをすることをお許しいただき、ネーミングと訳語選択にフォーカスしてみたい。というのも、訳語選択という営みの難しさについては、読み手からは余り意識されないが、一定の明快なフレーズを作り出すという点で難しい営みであり、取り上げるに値するテーマであると思われるからである。

### 伝達行為としてのタイトル化・フレーズ化

私たちは、何かの思いや考えを他者に伝えたいとき、それがたとえ自らに対する備忘録的なメモであっても、その目的や内容に照らして、その冒頭部にタイトルをつけるという行為をとる。その行為はタイトル化と称することができ、タイトル化という行為は、伝えたい対象者を示す宛名だけの場合もあれば、記述・叙述内容に即した名詞フレーズ（noun phrase）を選ん

でネーミングする場合もある。個人を特定する「お名前」をめぐってどのような考えや改名があったかについては、佐竹先生の講演において取り上げられているが、ここで触れたいのは、記述・叙述内容を端的に示し得る意味機能上の一単位をなすフレーズをどのように作るかという、いわばフレーズ化行為とその難しさについてである。

フレーズ化において留意したいのは、読もうという気持ち・意思を喚起する重要な役割を果たすという点である。言い換えれば、作られたフレーズは、それぞれのコトバ（word）が有している意味を端的に他者に伝える役割を果たすだけでなく、顕在的かつ潜在的に、読み手の関心をも動かすという点である。それは、コトバが一定程度の共通の意味を有しているからこそ可能になる。とはいえ、コトバは一義的ではない。それゆえ、さらにコトバとコトバで作られたフレーズになると、意味内容の理解という点で、個々の読み手の理解に多少のズレが出てくるという状況も招来する。

これらのことは、英和辞典や和英辞典を紐解けば容易に理解することができる。1つの英単語には様々な意味があり、また同時に、1つの日本語にも様々な意味が存在し、時には、いずれの意味が妥当か判断し難い場合もある。このことは、言語学習に取り組む際のハードルの1つにもなっている。さらに、コトバに対するセンスの善し悪しは、このハードルに対する個々の克服の仕方の程度の違いに応じて現れてくる。それゆえ、ある事象を言い表すために、コトバを用いてフレーズ化するという、いわばネーミング行為はその行為者の言語センスに依存する、といっても過言ではないであろう。そして、そのセンスを磨くために、人々は多くのコトバに触れて語彙（vocabulary）を習得し、それを繰り返し用いるという日常的行為を積み重ねるのである。とはいえ、テクノロジーやグローバリゼーションの加速度的な進行は、そうしたいわゆる地道な語彙習得の訓練の機会を減らし、学校での言語学習の優先順位を容易に低下させる傾向を招来する。岸本先生の講演は、こうした言語文化の変化に着目し、プログ・タイトルの研究に基づいて、それらが自己表現の一形態であり、そのメカニズムが「何を明示するか」によって異なることを解明したものであった。それゆえ、テクノロジーが加速度的に進行す

る状況下であっても、タイトルの付け方への工夫という思考は必要とされているのである。しかし、この傾向がいかに問題視されているかについては、文部行政の教育政策・方針を見れば、容易に理解することができる。というのも、文部科学省は、コミュニケーション能力の低下への反省に基づき、プロジェクト型の協働作業を推奨しているからである。コミュニケーション能力の低下への憂慮は改めて紙幅を裂いて論じる必要があるが、ここでは、コミュニケーション能力の低下が言語センスや使用語彙数の低下をもたらし、そのことによって、ネーミングの難しさをより進行させつつある、という点に言及するに留めておきたい。

### ネーミングと訳語選択

では、ネーミングの難しさがより実感されるのは、いったいどのような時であろうか。少ないながらも筆者の経験に照らせば、それは「訳語」を選ぶという行為、すなわち訳語選択においてであろう。その難しさは、とりわけ書籍タイトルの訳語選択の際に実感される。なかには真剣な議論によって決めざるを得ない場合も出てくる。タイトルの付け方を分類した玉井所長の講演に従えば、直訳には、A「英語の意味をとって、その意味をそのまま日本語に訳し代えたもの」、B「英語の意味を考慮したが、適切な日本語を当てることが困難な場合、英語の発音の通りにカタカナに置き換えたもの」、そして意識には、C「英語の意味を踏まえて、新たな日本語に表現し直したもの」、D「英語の意味を考慮せず、作品内に出てくる重要な登場人物に置き代えたもの」がある。筆者のように教育学を専門とする場合、タイトルの訳語選択は、一般的に A と B が多くなってくる。また、D という選択肢はおそらく存在しない。

そこで最後に筆者がこれまでに監訳した本の訳語タイトルを例に取り上げ、その際にどのような考えで訳語を選んだか、ということを紹介しながら訳語を選ぶ行為について考えてみたい。筆者の監訳本としては、『イギリスの初等学校カリキュラム改革—1945年以降の進歩主義的理想の普及—』（2006、つなん出版）、『幸せのための教育』（2008、知泉書館）、『教育史に学ぶ—イ

ギリス教育改革からの提言－』（2009, 知泉書館）、『進歩主義教育の終焉－イングランドの教師はいかに授業づくりの自由を失ったか－』（2013, 知泉書館）であるが、これらのタイトルがどのような考えによってつけられたかを紹介したい。

まず、『イギリスの初等学校カリキュラム改革－1945年以降の進歩主義的理想の普及－』であるが、その原典タイトルは、*Curriculum change in the primary school since 1945 : dissemination of the progressive ideal* (by Peter Cunningham, 1988, Falmer Press) であり、この書籍の内容は、イギリス (Britain) の初等学校のカリキュラムの変遷を第2次世界大戦終結後の1945年から執筆当時の1988年直前までの期間を対象に歴史的に辿っていったものであった。本書が対象としているのは、イギリスでは、インフォーマル教育 (informal education) や進歩主義教育 (progressive education) と称された教育思想が展開された時期であり、それはアメリカで1920年代に展開された進歩主義教育とは異なった意味内容を有していた。そのため、訳書のタイトルには存在しなかったイギリスという名詞を入れることを優先的に決めた。そしてそのことに付随する形で、‘since 1945’ (1945年以降) というフレーズの訳語をサブタイトルに移すことにした。また、‘change’ の訳語については、本文中ではコンテキストに応じて変化・変革・改革と訳し分け、タイトルでは、当時の日本でよく使われていた「カリキュラム改革」というネーミングに習って、「改革」というコトバを選択した。

次の『幸せのための教育』の原典タイトルは、*Happiness and Education* (by Nell Noddings, 2004, University of Cambridge Press) であったが、このタイトルの訳語については、『幸せ (しあわせ) と教育』や『幸福と教育』といった直訳ではなく、本文の内容をくみ取り、‘Happiness and’ の部分を「幸せのための」と訳すことにした。その過程では、当然のことながら、「幸福と教育」、「幸せと教育」、「しあわせと教育」といったタイトル訳の候補が出てきた。そこで、まず ‘happiness’ を「幸福」とするのか、「幸せ」あるいは「しあわせ」とするのかについて意見交換し、漢語だけにするのではなく、柔らかなイメージを読み手に与えることができる表記、すなわち、「幸せ」



とすることにしたのである。そして、全文を監訳し終えた段階で、書籍タイトルの訳語を、再度、検討することにした。その段階で出た意見は、‘and’の部分で「ために」とすることが内容に合致するのではないか、というものであった。それに対して、「否、ため論ではなくて、‘and’ とあるのだから、幸福と教育の間の関係論である」という意見が出された。しかし、‘and’を「と」訳しただけでは、読み手が関係論であると理解するのは難しいという判断により、最終的に、『幸せのための教育』とすることを決定したのである。

その次の『教育史に学ぶ—イギリス教育改革からの提言—』の原典タイトルは、*Lessons from History of Education* (by Richard Aldrich, 2005, Routledge) であった。本書の訳語の場合、当然考えられるのは、直訳した「教育史からの教訓」というフレーズである。ただ、これではあまりにも堅いイメージを読み手に与える。また、このような直訳では、本書の内容をうまく読み手に伝えることは難しい。そこで、まず、本書の内容がイギリスの教育史であることを知らせるために、原典には書かれていない「イギリス」というコトバを入れることを決めた。そうすると、「イギリスの教育史からの教訓」というフレーズ候補が浮かぶが、これではどのような内容の教育史にフォーカスしているかがわかりにくい。そこで考えたのは、原典には存在しないサブタイトルをつけるか否かに関する議論であり、サブタイトルをつけるとすればどのようなフレーズにするかについてであった。そんな中で出てきた意見が、「イギリス」というコトバをサブタイトルに入れることであった。そして、本書の内容の多くが教育改革の歴史であることから、その内容を端的に示す「教育改革」のコトバを入れ、さらに、原著者の本書執筆上のスタンスを「提言」というコトバに置き換えるという思考手順を踏んだのである。ただ、このように考えてみると、メインタイトルは「教育史の教訓」ではなく、「教育史に学ぶ」というように「に」という格助詞を置くことがいいのではないか、ということになった。というのも、このフレーズにするならば、日本という国からイギリスの教育改革の歴史について学び、そこから何らかの提言を得ることができる、というメッセージを読者に伝えることができるからで

ある。

こうした体験を積み重ねた上で取り組んだのが、筆者の直近の訳書『進歩主義教育の終焉－イングランドの教師はいかに授業づくりの自由を失ったか－』の訳出活動である。実は、この訳書の原典タイトルは、*The Death of Progressive Education : How Teachers Lost Control of the Classroom* (by Roy Lowe, 2007, Routledge) であった。そこで本書の第一次訳が終わった段階で、まずタイトルをどのように訳すかということを考えた。そこで意見の一致を見たのが、‘death’ というコトバを日本人として最初に思い浮かぶ訳語「死」を使わないで表現する、ということであった。そこで、「終焉」というあえて難しい漢語を使うことを考えた。その場合、気になるのは、このコトバが漢字としての表記が難しく、またあまり馴染みのない日本語であるという点である。しかし、この漢語は強いインパクトを持っており、教育における問題意識を読み手に与えることができる。ということで、このコトバを選ぶことを訳者間で決定した。さらに、‘progressive’ については、「進歩的」、「進歩的な」、「進歩主義」などが考えられ、また、‘progressive education’ の2語の訳ということになれば、「進歩的な教育」か「進歩主義教育」の2つの訳語が考えられる。ただ、「進歩主義教育」という訳語は、イギリスではなく、19世紀末から1920年代初めのアメリカで展開された新教育運動の歴史事象を表現する際のコトバであることも考慮に入れる必要がある。それゆえ、『イギリスの初等学校カリキュラム改革』の際の議論を紹介し議論した上で、最終的には、その歴史事象を端的に表現することができる「進歩主義教育」という訳語を選択した。そして、次に検討したのはサブタイトル ‘How Teachers Lost Control of the Classroom’ の訳語であった。その際にまず検討せねばならなかったのは、イギリスかイングランドかのいずれかのコトバを入れるということについてであった。本書では、イギリスというコトバよりもイングランドと限定をかけた方がいいのではないか、という見解が出され、その意見を採用し、サブタイトルにイングランドのコトバを入れることにした。そして、‘Lost Control of the Classroom’ の訳に際して、「いかに…か」というように問いかけのフレーズを採用し、「いかに授

業づくりの自由を失ったか」というフレーズを作ったのである。

このような検討を経て訳書タイトルのネーミングは、定まっていったわけである。これらは、英語の著作を邦訳する際に訳者らはどのような手順を踏み、その過程にどのような考えを反映させようとしてきたか、というまさに内部の話であり、そのような思考プロセスは余り語られない。ただ、上述のAからBのいずれに属するかと言えば、いずれもBに属することがわかる。このことは、逆に、Bになるように訳者は努力をしている、ということでもあろう。邦訳タイトルを見て、ある程度、英語タイトルがイメージできるようにという配慮がそこには働いているということもできる。

そこで最後に、このようなタイトルのネーミングがどのようにインパクトを与えるかに少し立ち入り、本コメントの「おわりに」に代えることにしたい。

### ネーミングとインパクト—「おわりに」に代えて—

書籍のタイトルは、いうまでもなく、ある種の「顔」・「看板」であり、それゆえ、そのイメージを左右する訳語選択に際しては一定程度の慎重さが求められる。また、販売促進の観点から、アカデミックな考えだけでタイトル訳を決めることはできない。つまり、出版社の意向をも反映させながら検討し、最終訳語に対しても出版社の同意を得る必要がある。どのような人々にメッセージを送ろうとしているのか、彼らにいかなる内容がインパクトを与えるか、といったように、他者の存在も無視することができない。こうした配慮の上に、それぞれの訳書のタイトルを考えるわけである。しかし、議論の末の訳語選択であったにもかかわらず、筆者の監訳本の売れ行きはというと、実は芳しくなく、第二刷に至ったのは今のところ『幸せのための教育』の1冊だけである。

推察するに、この背景には、日本の学校教育を試験結果に基づきながら競争主義的な観点から改革しようとする教育行政への批判や不満があったように思われる。「教育は子どもを幸せにするためにあるのだ」という極めてシンプルなメッセージが、当時の学校教育改革に批判的な読み手の興味を喚起

したのであろう。言い換えれば、「幸せのための教育」というタイトルが一定のインパクトをもった、と言えるかもしれない。そのことは、以下のある読者のブログからも読み解くことができる。

原題は、Happiness and Education『幸せと教育』であるが、邦訳はより本書の内容を反映していると思う。…本書は、人間にとって幸せとは何かを深く考える重要性から論じはじめ、個人の生活と公的生活を結ぶための教育にはどのような理論が必要なのか、はっきりと論じています。とりわけ、現在の世界情勢を考えるならば、ノディングズは、経済的成功を教育は目指すべきではなく、むしろつぎのことが大切だと主張します。暴力を理解し、未然に防ぐこと。平和教育に関する科目をもっと増やし、薬物乱用について理解し、治療を行うこと。自己理解をうながし、対人関係を増進すること。環境を保護すること（249頁）。教育に携わる者もまた、幸せでなければ良い教育をできないと喝破する本書は、今からの日本の教育を考えるうえで多くの示唆を与えてくれます<sup>1</sup>。

幸いにも近年は、読後感想をブログに紹介する人も出てきており、このような肯定的なコメントに出会うことは、訳業の醍醐味の実感につながり、それは至福の時をもたらす。というのも、この読者は本書を「幸せのための教育」とネーミングしたことにまず理解を示しているからである。ただ、社会の教育状況がよくないからこそ、逆説的に、このようなニーズが生まれるということも考慮に入れておく必要がある。また、むろん、書籍の訳語タイトルが読者の読書意欲をうまく喚起せず、また社会的ニーズが低く、たとえ訳本が市場に多く出回らなかったとしても、後世に残る訳本は数多くある。また、出版直後は市場に多く出回らなくても、長い年月をかけて読み継がれ、改訂訳が何度も出る訳本もある。それゆえ、一概に市場の動きが訳本タイト

---

<sup>1</sup> 認定特定非営利活動法人ウィメンズ アクション ネットワーク（WAN、理事長：上野千鶴子）ホームページ URL : <https://wan.or.jp/article/show/1087> (accessed 16th April 2017)

ルの成否を決めるわけではないことも念頭に置く必要がある。

とはいえ、訳本タイトルはその内容をいかに端的にネーミング化するか、ということに関わる智恵とセンスに依存するように思われる。その智恵やセンスには、社会情勢に対する智恵・センス、世間の人々の声なき声を聞き取るセンス、そして、それらに応答しようとする価値的態度（attitudes）が含まれているであろう。訳書が時代状況の中で、またタイムリーな形で何らかのインパクトを与えることにつながるならば、訳業の苦労も一定程度報われる。しかしながら、訳語選択は正解のない、また思考の継続を不可欠とする営みであり、また社会・政治・経済における問題意識を敏感に汲み取る幅広いセンスを不可欠とする営みでもある。ただ、そうであるからこそ、コトバ学という学的営為が必要になるのである。

### Ⅲ 言語文化研究所活動の概要 2015-2017



# 言語文化研究所活動の概要 2015-2017

## 1. 刊行物等

### (1) 『言語文化研究所年報』第25号

2014年3月に本学を退職された佐竹秀雄教授の退職記念号として、佐竹先生とかかわりのある23名が、佐竹先生との思い出などを中心に執筆したものを刊行した。

### (2) 『言語文化研究所年報』第26号

2015年12月12日（土）に開催した、第1回「武庫川女子大学言語文化研究所シンポジウム」の成果報告として、シンポジウムの発表者7名の論文を掲載して刊行した。

### (3) レポート（LCりぼーと）42号

研究所主催で行っている行事の開催報告である。「言語文化セミナー」、「言語文化シンポジウム」、「オトナのための日本語塾」の開催概要について記している。

## 2. 「言語文化セミナー」

### 第24回「言語文化セミナー」

日時：2015年11月3日（火・祝）午後2時45～4時45分

講師：恩田雅和氏（天満天神繁昌亭支配人）

演者：笑福亭三喬氏（松竹芸能）

テーマ：「落語を楽しみ、寄席の言葉を知る」

参加者：80名

概要：恩田雅和さんは、一般には知られていない寄席独特の言葉や、寄席の仕組みなどについてのお話くださった。上方落語界の王道を歩まれる

笑福亭三喬さんは、十八番の盗人噺「月に群雲」を披露してくださいました。

### 第25回「言語文化セミナー」（ことわざフォーラム2016）



言語文化セミナーの拡大版として、ことわざ学会と共催した。

日時：2016年11月12日（土）午前10時～午後5時

プログラム：

午前 研究発表

李惠敏(名古屋大学非常勤講師)「中国の学校における諺と成語の取り扱い」

高村美也子（国立民族学博物館外来研究員）「スワヒリ語とボンダイ語のことわざの比較」

武田勝昭（和歌山大学名誉教授）「カンタベリー物語の庶民とことわざ」

午後 ことわざフォーラム2016

講師：北村孝一氏（学習院大学非常勤講師）

テーマ：「ことわざの現在」

シンポジウム「庶民の暮らしとことわざ」

パネリスト：佐竹秀雄氏（武庫川女子大学言語文化研究所研究員）

森田登代子氏（NPO 法人ピースポット・ワンフォー副理事長）

永野恒雄氏（明治大学兼任講師）

#### 第26回「言語文化セミナー」（春季）

日時：2017年3月18日（土）午後2時～4時

講師：西光義弘氏（神戸大学名誉教授）

テーマ「英語と日本語の違いの根本的原因としての注意の集中度の差」

講演要旨：（西光先生より）

まず第1の具体的な例として、英語話者はよほどの場合以外にはひとりごとを言わないが、日本語話者はひとりごとをかなり許容することを観察する。その裏にある要因として発達心理学でいわれる3項関係および共同注意さらにはミラーニューロンなどの発見によって、コミュニケーションの基盤となる注意の配分に関する知見が控えていると考えられる。第2の具体的な例として志賀直哉の「城崎にて」の一節の英訳8種（英語母語訳者5種と日本語母語訳者3種）を比較する。英語母語訳者は原文の2種類の蜂のグループに均等に注意した英訳ができず、日本語母語訳者は原文の

通りに均等に注意を配分した英訳を行っている。また原文では蜂の移動の途中で目をそらして庭に咲いている八つ手に視線を移した後で、その八つ手に群がっている蜂に視線を戻した描写になっているが、英語母語訳者の内で極端に直訳の傾向がある2人だけが、原文通りの流れになっている。英語らしくする傾向のある3人は蜂が飛び立ち、空中を飛んで、八つ手に到着するのを視線をそらさず、追っている描写になっている。アメリカの文化心理学者が日本人とアメリカ人の被験者を対象として行った実験では同時に2つのことを行うことがアメリカ人学生より日本人学生の方が少しできやすいという結果も得られている。言語学者はともすれば、文字で表現されたある意味でメモ的な文を対象として分析するが、実際の言語行動は口調、ジェスチャーなどを伴う。注意の配分も言語活動を支える目に見えない必要不可欠なコンポーネントと考えることができる。注意の配分の方策の違いにより、日本語と英語の違いについてさらに追及できる諸現象を取り上げていく。

### 3. 「武庫川女子大学言語文化シンポジウム」

#### 第1回 2015年度

日時：2016年12月12日（土）午後1時～4時30分

テーマ：「言語文化の諸相―注釈、翻訳、翻訳語」

概要：言語文化の諸相を、注釈、翻訳、翻訳語という観点から多面的に考察を加えることにより、言語文化のもつ豊饒の世界を確認し、言語文化についての多様な研究の可能性を検討することを目的に開催した。

#### 第2回 2016年度

日時：2017年2月18日（土）午後1時～4時30分

テーマ：「ネーミングのコトバ学」

本学の特別学期公開講座との共同企画として開催した。

概要：第1部：公開講座

玉井暲「外国文学作品の翻訳タイトルの付け方」

岸本千秋「人気ブログのタイトルに見られる工夫」

佐竹秀雄「お名前物語」

第2部：シンポジウム（討論）

問題提起：ネーミングのコトバ学について

講師：玉井暲（英文学）、岸本千秋（現代日本語学）、佐竹秀雄（現代日本語学）

コメンテーター：柴田清継（漢文学）、設楽馨（日本語学）、富永英夫（英文学・英語教育）、山崎洋子（教育学）

#### 4. 「ことばのサロン」

第7回「ことばのサロン」

日時：2015年7月25日（土）午後1時30分～3時30分

講師：佐竹秀雄氏（武庫川女子大学 言語文化研究所研究員）

テーマ：「食事とコミュニケーション」

概要：「いただきます」「ごちそうさま」「よろしゅうおあがり」のような「食事のあいさつ」には、どのような意味がこめられているのか。また、いつもの食事時、私たちはどのようなことを話しているのかなど、食事と関係することばについて参加者で話し合った。

第8回「ことばのサロン」

日時：2016年7月23日（土）午後1時30分～3時30分

講師：佐竹秀雄氏（武庫川女子大学 言語文化研究所研究員）

テーマ：「フリーコミュコミュ」

概要：知らない人と一緒になったとき、話しかけるか、話しかけないか。また、それはなぜか。話しかけて得をしたこと、損をしたことはないか。望ましいのはどちらかなど、「話をしてもしなくてもよいときのコミュニケーション」について参加者で話し合った。

#### 5. 「オトナのための日本語塾」

概要：2015年度からの開講である。「ことばのサロン」を体験したLC倶楽部会員たちが、自分の興味あることがらについて「自主的に調べ」、そ

れを「まとめて発表する」ことを目標とするものである。

開催日：年間 5 回、各回10：30～12：30

〈2015年度〉2015年 5月23日（土）、同年 7月 4日（土）、同年 9月12日（土）、同年11月14日（土）、2016年 1月30日（土）。

〈2016年度〉2016年 5月28（土）、2016年 6月25日（土）、2016年 9月17日（土）、2016年11月26日（土）、2017年 1月28日（土）。

成果：『オトナのための日本語塾2015』（執筆者 7 名）。『オトナのための日本語塾2016』（執筆者 3 名）。

## 6. 「ひと・ことばフォーラム」（旧「ひと・ことば勉強会」）スカイプ

2012年度夏の準備期間を経て、2012年 9 月に第 1 回を開催し、2、3 月に 1 度の開催を目標としている。第 1 回から第 5 回までは、「ひと・ことば勉強会」として開催し、その後、「ひと・ことばフォーラム」に名称変更した。

関東会場の東洋大学と、関西会場の本研究所とをスカイプで結んで行っている。2015年度、2016年度の開催は次の通りである。

第14回 2015年 7月11日 東洋大学&武庫川女子大学言語文化研究所

第15回 2015年10月 3日 東洋大学&武庫川女子大学言語文化研究所

第16回 2016年 1月16日 東洋大学&武庫川女子大学言語文化研究所

第17回 2016年 3月12日 公開研究会 東洋大学 白山キャンパス

第18回 2016年 7月 2日 東洋大学&武庫川女子大学言語文化研究所

第19回 2016年 9月24日 東洋大学&武庫川女子大学言語文化研究所

第20回 2016年12月 3日 東洋大学&武庫川女子大学言語文化研究所

第21回 2017年 3月 4日 公開研究会 東京大学駒場キャンパス

## 7. 事務報告

### (1) 組織

所 長：玉井 暁

助 手：岸本 千秋

研究員：佐竹 秀雄

研究員：設楽 馨

研究員：柴田 清継

研究員：富永 英夫

研究員：山崎 洋子

執筆者紹介：

玉井 暲 本学言語文化研究所所長

李 惠敏 名古屋大学非常勤講師

高村美也子 国立民族学博物館外来研究員

武田 勝昭 和歌山大学名誉教授 ことわざ研究者

北村 孝一 学習院大学非常勤講師

森田登代子 桃山学院大学非常勤講師・NPO 法人ピースポット・ワン  
フォー副理事長

佐竹 秀雄 本学言語文化研究所研究員

永野 恒雄 明治大学兼任講師

岸本 千秋 本学言語文化研究所研究員

山崎 洋子 本学言語文化研究所研究員

## 編集後記

言語文化研究所年報第27号をお届けいたします。今号は、言語文化研究所と「ことわざ学会」との共催による「言語文化セミナー」（ことわざフォーラム2016）での開催内容と、「言語文化研究所シンポジウム」の開催概要を中心といたしました。山崎洋子研究員の論文も掲載しております。編集に時間がかかり、発行が遅くなってしまったことについては、まことに申し訳なく存じます。ご高覧の上、お気付きの点、著者らへのご意見などをお寄せいただければ幸いに存じます。

岸 本 千 秋

2017年3月26日 印刷  
2017年3月31日 発行

編 集 者

武庫川女子大学  
言語文化研究所  
電話 0798-45-3536 (直通)

発 行 者

武庫川女子大学  
西宮市池開町6番46号

(非 売 品)

印 刷 所

大和出版印刷株式会社  
神戸市東灘区向洋町東2-7-2